

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20510231

研究課題名(和文) フィリピン南部の武力紛争：紛争当事者の動向分析を中心に

研究課題名(英文) Armed Conflict in the Southern Philippines: An Analysis on the Conflicting Actors

研究代表者

石井 正子 (ISHII MASAKO)

大阪大学・グローバルコラボレーションセンター・特任准教授

研究者番号：40353453

研究成果の概要(和文)：

本研究では、フィリピン南部の紛争アクターのうち、1)モロイスラム解放戦線(MILF)、2)モロ民族解放戦線(MNLF) EC15 派、3)MNLF ミスワリ派の3つに注目し、主に関係者へのインタビュー調査を通じて、その動向を分析した。MNLF と政府との和平合意の行方が混迷するなか、MILF は支持者を増やし、MNLF は分裂弱体化している実態が理解できた。一方、MILF も政府との和平交渉が進まないなか、支持者の裾野は広げつつも、内部に意見相違があることが分かった。これらの研究調査により、紛争が長期化する原因について理解を深めた。

研究成果の概要(英文)：

The research focused on the 3 main actors of the armed conflict in the southern Philippines; 1) Moro Islamic Liberation Front (MILF), 2) EC 15, Moro National Liberation Front (MNLF), 3) Misuari Faction, MNLF. It adopted the interview as a method of research. While the Final Peace Agreement between the Philippine government and the MNLF has lost its way toward implementation, the MILF gain more supporters among Muslim people. However, MILF is also not monolithic in their peace negotiation with the government.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：フィリピン、紛争、地域研究、イスラム

1. 研究開始当初の背景

1996年9月、フィリピン南部で分離運動を展開してきたムスリム中心のモロ民族解放戦線(Moro National Liberation Front: MNLF)と政府が最終和平合意に署名した。フィリピンのムスリムは全人口の5%をしめる少数派である。

しかし、この1996年の最終和平合意は南

部に平和と安定をもたらしていない。まず、和平合意に反対したモロイスラム解放戦線(Moro Islamic Liberation Front: MILF)が、1997年1月に国軍との間で大規模な武力衝突を起こした。直後に停戦合意にいたったが、すぐに紛争が再発。以来、国軍とMILFは、武力衝突・停戦合意・停戦合意破綻、というサイクルを繰り返している。それゆえに

今日ではフィリピン南部の紛争は主に国軍とMILFとの構図で捉えられている。

しかし実際には、南部の紛争は序々に多様で複雑な様相をみせはじめている。例えば、MNLFは2001年に大きく2派に分裂した。それらは、創設者ミスワリ議長を中心とする一派(Misuari Royalists, 一般紙ではMNLF Breakaway Group: MBGと表記される)と、MNLF指導者15人を中心とする一派(Executive Council 15: EC15)である。2005年2月には、スル州にてMNLFミスワリ派と国軍との間で戦闘が繰り広げられ、多くの人びとが犠牲になるなど、紛争は長期化の兆しをみせはじめている。加えて、アブ・サヤフ、ペンタゴンやアブ・ソフィアといった武装集団による爆破、誘拐、殺害が南部を不安定化させている。

(1) MILF

MILFは1997年以降、国軍との間で武力衝突を繰り返している。なかでも大規模なものは次の2つであった。2000年3月、エストラダ大統領が「全面戦争」を宣言し、7月にMILFの最重要基地であるアブ・バカル基地を攻撃。国内避難民の数は100万人にもなった。2003年2月、アロヨ政権時代にも、石油と天然ガスの埋蔵地であるリグワサン湿地帯にあるMILFの拠点を国軍が攻撃。40万人以上が避難を余儀なくされた。この間、政府とMILFとの和平交渉は中断と継続を繰り返した。和平に関する合議、停戦や平和維持に関する文書を合わせると39にもなるという(Santos Jr. 2005)。本研究では、紛争・停戦・停戦破綻のサイクルが、なぜ繰り返されたかを考察する。

一方、従来MILFの武力闘争の目的は「イスラムを実践する社会の実現」であるといわれていたが、近年の和平交渉にその希求はみられず、むしろ「先祖伝来の土地(Ancstral Domain)」の確保が主な要求の一つに掲げられている。MILFは2003年に創設者のハシム・サラマト(アズハル大学で12年学んだ経験をもつ)が死亡してから、ムラド・イブラヒム(海外での留学経験がない)に代表者が交代し、指導部層の性格変化が指摘されている。

(2) MNLF Executive Council of 15 (EC15)

2001年4月28-29日、MNLF中央委員会メンバー40人のうち15人がミスワリ議長の権限を否定する決議文を作成した。一方、時を同じくして4月29-30日には、第4回MNLFバンサモロ人民会議が開催され、ミスワリへの忠誠宣言が行われた。

以来、MNLFは大きく二つに分裂したといえる。2001年11月のムスリム・ミンダナオ自治区(ARMM)の知事選では、EC15に属するパロク・フシンが当選し、5年間知事を勤めたミスワリに交代した。以来、アロヨ政権は

EC15を相手に、1996年和平合意の実現を目指そうとした。しかし、両者の蜜月時代は長く続かなかった。2005年8月の知事選では、ザルディ・アンパトゥアンがアロヨ大統領と同じ与党から立候補し、初のMNLF出身者以外の知事が誕生することとなった。

このEC15については、フシンと数名の指導者をのぞいては、実態はよく知られていない。今日、EC15は政府とも距離をおき、MNLFミスワリ派とは決裂し、行先を見失っているようにみえる。本研究では、EC15に関する情報をできるかぎり集め、その動向を追い、役割を明らかにする。

EC15の動向を追跡することの重要性は次のとおりである。第一に、EC15は、国政レベルでは政治力を失ったとはいえ、フィリピンのムスリム社会に一定の影響をもっている。第二に、紛争研究では、紛争当事者が活動を沈静化させている時期の動向分析こそが、紛争勃発の原因解明に重要である。

(3) MNLF ミスワリ派

MNLFの創設者ミスワリは、2001年11月のARMM知事選直前に、スル州とサンボアンガ市でおきたMNLFによる国軍拠点の攻撃の責任を問われ、逮捕された。その後、ミスワリは収監された。しかし、MNLFミスワリ派は、スル州やサンボアンガ市のタウスグ人とサマ人を中心に、根強く支持者を保っている。一方、別の見方をすれば、支持者は局地的かつ特定のエスニック集団に限られてきた、ということもできよう。MNLFは当初から、「モロ(フィリピン・ムスリムの総称)」の代表を主張してきたが、実態はフィリピン・ムスリムの13の民族集団のゆるやかなまとまりでしかなかった。今日では、MNLFミスワリ派が主張する「モロ」の代表という理念と、支持者の実態とのギャップは一層明らかである。本研究では、MNLFミスワリ派が、局地的・特定エスニック集団に収斂していく過程を分析する。

2. 研究の目的

本研究は、1996年和平合意後の紛争にかかわるアクターのうち、「MILF」「MNLF EC15」「MNLF ミスワリ派」の3つに注目し、動向分析を行うものである。その目的は、3つのアクターそれぞれが関わる紛争要因と、それらの相関関係を明らかにすることで、なぜ紛争が再発し、長期化の傾向をみせはじめたかを考察することである。

3. 研究の方法

(1)メディアの情報を収集しながら、3つのアクター(MNLF、MNLF EC 15、MILF)の動向を追跡した。

(2)3つのアクターの関係者へのインタビュー

ーを行った。

(3)政府とMNLFとの最終和平合意以後の交渉過程に関する情報収集を行った。

(4)政府とMILFとの和平交渉に関する文書や決議文、委員会に関する文書、共同声明、ガイドライン等の分析を行った。

4. 研究成果

以下、3つのアクターに関する主な調査成果を述べる。

(1) MILF

- ・ 1997年以降の政府とMILFとの和平交渉に関する文書や決議文、各委員会に関する文書、共同声明、ガイドライン等を収集し、分析を行った。
- ・ 上記の文書は一冊の本に編纂されてまとめられるほど多いが、それらの文書の実行力は弱く、紛争が再発する。つまり、和平交渉に関する文書は、それを守るために作成されるよりは、それを作成することによって時局を政治的に乗り越えることに意味があるのではないかと、この仮説にいたった。
- ・ 2008年8月に政府とMILFとの最終和平合意の前提となる「先祖伝来の土地に関する覚書(MOA-AD)」に最高裁判所が一時差し止め命令を発令することにより両者の署名がなされなかったことに関連して紛争が拡大し、和平交渉が暗礁に乗り上げた。2008年8-9月に起きた紛争の動向を時系列にまとめた。
- ・ MILFのメンバー3名に対するインタビューを行った。
- ・ MILFは、MNLFが政府と和平合意を形成し、国政に参加することに不満を強めた元MNLFメンバーを吸収、拡大していることがわかった。

(2) MNLF EC 15

- ・ 元EC15であった3名にインタビューを行った。
- ・ インタビューの内容の限りでは、EC15の一部は決してミスワリに反旗を翻すつもりでEC15を結成したのではないことがわかった。EC15はミスワリをChairman Emeritusという位置づけにすることによって、一定の敬意を払ったつもりであった。一方、EC15を結成したことによるミスワリ側の怒りは大きかった。ミスワリが拘禁されているあいだ、インタビューに応じたEC15のメンバーは何度か見舞いの手紙のやりとりをし、関係改善を図っていたことも分かった。

(3) MNLF ミスワリ派

- ・ MNLFのNUSO(National Urban Special Operation)の将官にインタビューを行った。また、2名のコマンダーにインタビューを行い、動向調査を行った。

- ・ 2010年5月の全国総選挙にミスワリがスル州の知事として立候補したことに際し、NUSOは集票マシンとして機能していた。その動向から、1996年9月の和平合意以降、MNLFが国政に参加することにより、MNLFの幹部の一部が出身地方を中心に地方有力政治家(地方ボス)化していると観察し、アジア政経学会において報告を行った。
- ・ 3月18日のMNLF発足記念日には、ランガニ州南コタパト州ティボリ町にあるMNLFのキャンプを訪れ、状況を観察した。MNLFと少数民族との関係について理解を深めた。
- ・ タウイタウイ州およびマレーシアのサンダカンにおいてミスワリに反感をいだく元MNLF兵士にインタビューを行った。

紛争の長期化の原因は、多様な紛争アクターが絡んでいること、フィリピン南部に自治権を確立する現実的な方策を見つけることが難しいこと(MOA-ADの破綻)、フィリピン政府側に南部の問題を解決することの政治的意図が欠落していること、などであることが分かった。

現在、国際社会の和平調停は、主にフィリピン政府とMILFとのあいだで行われている。MILFが元MNLF兵士のあいだに勢力を伸ばしていることは確かだが、和平交渉がフィリピン政府とMNLF、フィリピン政府とMILFと完全に二方面に分かれて(two tracks)行われていることは、包括的な地域社会の平和構築のためには問題となると思われる。

また、2008年8月のMOA-ADの破綻に際して紛争が拡大した一連の騒動により、紛争が長期化する一つの原因が、紛争解決にむけた政治意図がフィリピン政府側に欠落していることであることが明確になった。中央政府が紛争の解決に真剣ではない限り、和平合意は形成されては、破綻し、紛争が再発することが今後も繰り返されると考えられる。

さらに、ムスリム有力地方政治家とキリスト教徒有力地方政治家の一部が、和平交渉のいわゆる「スポイラー」として立ち現れることがあることも分かった。2008年8月のMOA-ADの署名に強く異議申し立てをしたのは、ミンダナオ島の3名のキリスト教徒有力政治家であった。

なお、研究期間中の2009年11月に、フィリピン南部ミンダナオ島マギンダナオ州で57名が虐殺される事件が起こった。いわゆる「マギンダナオ虐殺」である。これは、2010年5月の全国総選挙におけるマギンダナオ週知事選をめぐって、2つの対立するムスリム地方有力政治家が争ったことが原因であった。この事件は、その規模と残虐性により世界を驚愕させた。同時に、あらためてフィ

リピンの地方有力政治家のもつ不当な権力や、それらの政治家どうしが地方選挙において銃 (gun)、私兵 (goon)、買収 (gold) の「3G」を用いて構想を展開し、多くの一般市民が巻き添えになることの問題を明らかにした。

虐殺の首謀者であるアンパトゥアン一族は、2004年の大統領選挙でマギンダナオ州におけるアロヨ票をとりまとめ、勝利に導くことに貢献したことから、アロヨ大統領と政治的パトロネージを取り結ぶことにより、合法的に私兵と自警団を増強していた。アンパトゥアン一族は、マギンダナオ州に展開するMILF第105部隊と土地をめぐる対立する関係にあった。このことは、アロヨとアンパトゥアンに自警団と私兵を増強する口実を与えていたのであった。

以上のことから、フィリピン南部の紛争は、一般的にはフィリピン国軍側対 MILF という構図で報じられるが、その実態の一部はムスリム有力政治家の私兵・自警団対 MILF であることが分かった。フィリピン南部の紛争が長期化する原因の一つに、地方有力政治家および一般住民のあいだに武器がまん延していることをあげることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

ジェームス・ナクトウェイ・石井正子 (2009)「ナクトウェイのフィリピン報告：戦乱のミンダナオ」『Days Japan』6(10): 24-29. 査読無

石井正子 (2009)「フィリピン南部の紛争：日本とのつながりの視点から」『インパクション』167: 5-10. 査読無

石井正子 (2009)「近くて遠い紛争：フィリピン南部の紛争と日本」『国際人権ひろば』(86): 4-5. 査読無

Ishii, Masako. (2008) Introduction and Editing. Longing for Peace: A Documentation Research on the Mindanao and Sulu Conflict Areas. Unpublished Report. 査読無

石井正子 (2008)「フィリピン南部の紛争と人権侵害：保障されない個人の安全」栗本英世(編) GLOCAL ブックレット 01『紛争後の国と社会における人間の安全保障』13-27. 査読無

石井正子 (2008)「フィリピン南部の紛争：暗礁に乗り上げた和平交渉」『ASIAN Info』2(4): 2-5. 査読無

[学会発表](計2件)

アジア政経学会

2010年6月12日 石井正子「フィリピン南部の視点から：和平合意後のモロ民族解放戦線の動向：国政参加後の変化を中心に」2010年度アジア政経学会西日本大会「国境に生きる人々からみる東南アジアの政治変動」(京都大学)(招待発表)

日本平和学会

2008年11月23日 石井正子「討論」開催校特別企画フォーラムForum on Moro Women Leaders: Peace Initiatives of Women Under Armed Conflicts. (「モロ女性リーダーによるフォーラム：紛争下における女性の平和への取り組み」)日本平和学会2008年度秋季研究集会(名古屋学院大学)

[その他]

フィリピン南部のイスラム教徒の人びとと社会、南部の紛争を紹介するブログ
Kulintang
<http://kulintangmusic.blog135.fc2.com/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

石井 正子 (ISHII MASAKO)

大阪大学グローバルコラボレーションセンター・特任准教授

研究者番号：40353453